

# くちをしきもの、見ぐるしきもの、うつくしきもの ——京大タテカン問題に端を発して

吉田英生（S53/1978卒） [sakura@hideoyoshida.com](mailto:sakura@hideoyoshida.com)

## はじめに：百万遍の今と昔

機械系3専攻が桂キャンパスに移転してから、この年末で6年になります。標高130メートル程度の山上から京都市を東に見下ろす眺めはなかなかのものですが、木々も人もまばらで寂しいことは否めません。このため、定期的に学部講義で「これぞ学園」というべき吉田キャンパスに通えるのは大きな楽しみの一つです。1限目の講義にはキャンパス間連絡バスは利用できないこともあり、筆者の場合、河原町通り経由の市バス17系統あるいは3系統で西側から百万遍に入ります。この交差点を数学平面に例えるなら、第1象限：郵便局（・少し離れますが進々堂）、第2象限：マクドナルド・サイゼリア・セブン-イレブン・王将・吉野家・すき家、第3象限：ローソン、KFC（その前はSubway）・松屋・CoCo壱番屋・ももじろう、そして第4象限がわが京大です。第2・3象限は牛丼3社の競合に象徴されるようにフードチェーン店のメッカになっていることがご理解いただけると思います。以下には、対比のために、60年あまり前の百万遍の貴重な写真を示します。



### 昭和30年ごろの百万遍交差点 京都市電物語（京都新聞社、1978）より

（見開きページに広がっていた写真を左右で合成したため、接合部が少しはがれています。余談ながら、手前に見える第一銀行は、第一勧業銀行、みずほ銀行を経て、現在はドラッグストア・100円ショップになっています。）

## くちをしきもの

筆者は、朝一の講義の場合、開始2時間前の6時台に百万遍バス停そばでコーヒーを飲んで寝ぼけた頭を活性化させたのち、第4象限である京大のタテカンを見て「おっ、学生たち元気にやってるな」と思いながらキャンパスに入るのが常で

した。ところが、京都市が歴史的景観を保全するためという理由で公道に面したところからのタテカン撤去を繰り返し要請したため、5月13日（日）に大学当局によりタテカンが撤去され、雰囲気は全く変わってしまいました。このことは全国紙でも報道されましたので、京機会のみなさまもよくご存じのことと思います。



百万遍第4象限 6月8日



5月25日



5月25日

もちろん、このようなことで黙っている京大生ではありません。写真のようなタテカンが出現するのを、金曜の講義で来るたびに、たのもしくも見ておりました。しかし、6月15日午前7時すぎ——梅雨のどしゃ降りの中、たまたま百万遍の門から大学に入ろうとした筆者は、多数の雨がっぱ集団（+リヤカー2台）と出会い、看板が撤去されるシーンに遭遇しました。

本件につき、京大はやむなく市の規制に従わされている面がありますので、筆者は大学当局ではなく、むしろ市に対して、このような規制が筋違いであることを訴えたいと思い、「京大のタテカン文化を守る署名」にも賛同し、以下のようにそのウェブサイト <https://tatekan-mamoru.jimdo.com/> に記名投稿しました：

タテカンそのものへの思いは、既にたくさん指摘されているので省略し、別の点から、つまり京都の景観と京大のタテカンなど全く関係ないと思う点からの応援メッセージです。

京都の景観（雰囲気）をわるくしているのは、例えば

- ・ 恥ずかしい限りの電柱・電線
  - ・ 名刹のごく近くなどでも満艦飾の施設の存在
- などであり、また、景観に限らず
- ・ 市バスが市役所前を通過するときなどの英語電子音「京都：KI！YOTO」に代表される正気の沙汰とは思えない発音
  - ・ 市バスの乗車口ドアが開いているときのチャイム崩れのような陰気な音楽
- などです。

京都市はこのようなことを放置あるいは無神経にも自ら行いながら、まったく見当はずれの規制をしているわけです。

一方、街の美しさでまず思い浮かべるのはパリですが、そのパリの鉄道（地下鉄部分も含め）沿線の壁はけっこう上手な落書きで埋め尽くされています。筆者の想像にすぎませんが、その落書きは、ほとんどの市民は稚気・茶目っ気に満ちたものとして容認して（諦めて）いて、それによってパリの美しさが根本的に損なわれると思っている人はほとんどいないのではないかと思えるのです。筆者は、パリのたわいない落書きと京大の主張あるタテカンを同列におくつもりはありません。それどころか、京大のタテカンは自己表現の下手な日本の中では稀にみる活気ある表現形式であると評価し、公道の景観云々といった理由で一律規制しようとする姿勢こそ、昨今の外形的エビデンス重視の悪しき例と思います。

## 見ぐるしきもの

前節の引用文中で既に言及していたことですが、以下の写真をご覧ください。京都が誇る先斗町、この頭上は、空が明るい間は見られたものではありません。慣れっこで感覚のマヒしている日本人はともかく、憧れの京都を訪れた外国人はどのような思いでこの景観を眺めているのでしょうか。もちろん先斗町は極端に道幅も狭くかつ密度も高いので、電線を地中化するのは簡単ではないでしょう。しかし、戦後70年以上経過し世界でも屈指の繁栄を築き上げた日本——その観光の中心である京都にできないことではないはずですが。京大正門前・吉田神社参道の立派な道路でさえ電柱は堂々と残って、大文字の前に立ちはだかっています。



先斗町の空を圧倒する変形電柱と電線

京大正門前・吉田神社参道

(いずれも7月1日撮影)

## うつくしきもの

さて、結びは気分転換したいと思います。この4月から6月にかけて郷里の田舎



(三重)に何度か帰ることがありました。そのときに、田舎の高校から上京(東京と京都)して44年あまり、長らく忘れていた風景に出会ったのです。私たちの子ども時代とは異なり、田植えはずいぶん早まってゴールデンウィークごろには田んぼは水をたたえています。以下の写真では、水田がまさに鏡のように背景を反転して映しています。水田が果てしなく広がる田舎では、村全体が湖のような鏡になっています。(そういえば、夜には「田毎の月」という言葉もありましたね。)しかも、この鏡は稲の生長とともに緑色をおび、やがては緑の絨毯に変わっていく光景を目の当たりにできました。



近鉄電車から (5月16日)

コメ自体は毎食の茶碗の中にふっくら輝く白米を見つつも、それは自分の意識の上では、近所のスーパーで購入したビニール袋に封入された食品としてしかとらえることができず、その育った時空間とは分断されていたことに気づいたのです。このようなとらえ方は、筆者に限らないのではないかと想像するのですが、みなさまいかがでしょうか？

## おわりに：清と濁

拙稿を書いているうちに、「〇〇〇〇きもの」というキーワードから、思いは自ずと枕草子につながりました。調べてみると、清少納言は私たちからちょうど千年くらい前に生きた人のようです (ca. 966–1025)。蛇足ながら読みは清／少納言のはずですが、かつての筆者も仲間もそして高校時代の古典の先生も清少／納言と読んでいたような気がします。世界に目を向けると、Kuala Lumpur (「泥が合流する場所」という意味だそうです) をクアララン／プールと発音するのと似ていますね——意味は「清」と「濁」で、対照的ではありますが。